

個体化の根源に関する一考察

——トマス・アクィナスとドゥッンス・スコトゥスにおける——

大 鹿 一 正

序

中世西欧に「個体化の根源」 *principium individuationis* という問題がある。よく知られた例として、トマスにおける「指定された質料」 *materia signata* とか、スコトゥスの「個別性」 *singularitas* (後に「このもの性」 *haecceitas* として知られる) とかがそれである。以下の小論はこれら個体化の根源とは如何なるものとして理解されるかについての一つの見方を提示するものである。

個体化の根源ということをめぐっては幾つかの前提が認められる。すなわち、個体化とは、一つの種に属する多数の個体達が如何にして相互に区別されているかという疑問に発して、それらの個体達をそれぞれその個体たらしめている根源は何かということである。だから、はじめに個体化さるべき種という普遍的なものの存在が前提されていて、然る後にそれに対するものとして個が出てくるのである。従ってこれは、普遍と個という問題状況の中で考察せらるべき問題ということになる。次に、普遍をめぐっては幾つかの特殊な問題が生ずるのは周知のごとくであるがそれは一応措くことにして、個体についてもいろいろな問題が関わってくる。すなわち、先づ、個体というもの自体が二つの面を有っているということである。個体、それは普通には個物と呼ばれるが、個物は我々のまわりにこの自然世界に現実に実在して我々の日常生活に最も関わりの深いものである。そして日常的に関わりを有つということは、常に、*hic et nunc* にそれを把捉し理解しているということであり、すなわち、我々の直接的な認識対象にほかならない。これは認識論

的なアスペクトで捉えられた個物といえよう。それは常にその都度 *hic et nunc* に我々と出会う。然るに、更に、かかる個物は殆んどの場合、或る期間継続的に存続するのである。例えば、個としてのソクラテスは、出生以来、幼児から少年、青年を経て老人となり死に至るまで同じ一人のソクラテスである。(いま死後の問題は措くことにする。) つまり、種としての人間の中にソクラテスやプラトンやその他多数の人間達が存在するごとく、個としてのソクラテスにも、いま時間軸 $t_1 t_2 t_3 \dots$ をとれば、 t_1 のソクラテス、 t_2 のソクラテス、 t_3 のソクラテス……と多数のソクラテスが存在し、そのすべてを我々は一人のソクラテスとして見るのである。これは存在論的アスペクトにおいて見られた個物といえよう。そしてこの両者は表裏一体まさに分ち難いものである。更に一つ、中世西欧においては、一般に、現世に存在する凡ゆる個物は神の創造によるものであるという理解がある。トマスもスコトゥスも勿論この中で生きている。更にいま一つ、トマスの場合もスコトゥスの場合も、個体化の問題その他一般に哲学的諸問題を考察する枠組として、アリストテレスの理論を中心とするギリシア哲学の体系が存在していて、その枠の中で各種の制約を受けながら当面の問題を処理すべく努力しているのがうかがわれるのである。この問題に関わる一つの制約として、質料の実体を規定する最下位の形相的原理は種の形相であるという原則がある。それが、エイドス・エスカトン、アトモン・エイドスとしてプラトン以来定着している。ところで、質料の実体を究極的かつ全面的に規定するのは実体的形相と呼ばれるものであるが、いま、人間の実体的形相は知性的魂であるといわれ、従って、ソクラテスの実体的形相はソクラテスの魂でなくてはならぬ。種としての共通的な実体的形相が如何にして個の実体的形相へと特定されうるか、これが個体化の根源の問題となる。

以上のごとき諸前提を抱える問題状況の中で、はじめに挙げたトマス・アクィナスの「指定された質料」と、ドゥッンス・スコトゥスの「個別性」が、如何なる意味において個体化の根源たりうるのかを以下に検討する。

§ 1 トマス・アキナスにおける個体化の根源 としての「指定された質料」について

上にこの問題の前提の一つとして、個の問題は普遍との関連において考察されるべきことを挙げたが、古代ギリシアの哲学的世界像における最も基本的な特質として、普遍的なものの個体的なものに対する形而上学的優位というところがあり、それに対して、個としての人間の救済を本質的思想としたキリスト教世界は最後まで適合することができず、この伝統的な普遍優位の形而上学を逆転して、個体優位の哲学が要請されるのは思想史の当然の流れであったことを別括して、新しい中世哲学史観を提唱したのはハインツ・ハイムゼートであった。然し彼は、その要請に応え形而上学的な意味での新しい個体主義が始まるのはウィリアム・オッカムにおいてであり、トマスもスコトゥスも含めて、十三世紀までは全く古代の傘の下に入って居るとする¹⁾。然し、確かに、より前なる普遍を廃したのはオッカムであるけれども、個体との関連において普遍の成立を説明しきることができず、単なる論理学的事実の整理と記述に了っている以上、ハイムゼートのいう個体優位の哲学の確立にはなお遠いといわなくてはならぬ。それに対して、トマスとスコトゥスの個体化の根源の理論のそれぞれの立場における完成は、個体優位とはいわないまでも、少くとも、個を普遍と同格の存在として確立したとは充分にいうるものである。そして、ハイムゼートのいう優劣の逆転ということは、時代的要請としては考ええようが、哲学という場においては如何かとも思われるのであり、両者の個体の哲学の確立は充分に評価されるべきものであり、同じ要請に答えているものといわなくてはならぬ。

すなわち、上に、個体化の説明として、共通的な実体的形相たる人間の知性的魂が如何にしてソクラテスの魂へと特定されるかが問題であると述べられた。トマスは、事実、個体化の問題、個物の問題を、単なる質料的実体のこととしてよりも、知性的な質料的実体である人間を中心に考察している。勿論、その理論は質料的実体のすべてに妥当すべきものであり、また

妥当するのであるが、その意識の関心の中心は常に人間であることが看取される。そして彼はその人間を第一にすることの、宗教的・神学的でない、哲学的な根拠を『神学大全』第一部に展開している²⁾。すなわち彼はこういつている。個別的なもの、個は、あらゆる範疇において見出だされるものであるが、実体の範疇において見出だされる個が、他の範疇において見出だされる個に対して中心的なものとしての意味を有っており、更に、実体の中でも理性的実体においてこそ、個別的なもの、個体的なものが一層特殊な、そして、一層完全な仕方で見出だされるものである、と。すなわち、実体は、先づ第一に、それ自身において個体化されるのであり、それに対して、他の附帯的な範疇に属する個別はその基体たる実体の個性性に基づいて個体化されるのであること、例えば、「この白」は、それが「この基体」のうちに存するかぎりにおいて語られる、というのである。更にまた、理性的な実体においては、個別的なもの、個体的なものが一層のこと特殊なそして完全な仕方で見出だされるというのは、これら理性的諸実体は、自己の行為に対する自主性を有し、他のもののごとく、単に働かされるのみでなく自らによって働らくものである。然るに、諸々のはたらきを行うところのものこそは個別者にはかならないのだから、というのである。ここにおいて、個体化という時の個体は、質料的実体の場合、理性的な質料的実体たる人間において、最も個体的な個体、個体を代表するもの、が見られるのである。

ところで、トマスにおいて、個体化の根源としての「指定された質料」の概念が出て来るのは諸書に互っていて、そのすべてを網羅することは難しいので、ここでは便宜、初期の作品たる『有と本質について』と、主著『神学大全』の第一部によって、この概念の使用例とその雰囲気を見出し、次いで詳論を展開している『ボエティウス三位一体論註解』によってその理解を完全にし、終りに、彼の思想体系の中でどのような意味を有つかを考えたいと思う。

『有と本質について』において、この「指定された質料」の概念と議論は、第二章の複合実体の本質についての考察の中に出て来る。すなわち、複

合実体とは形相と質料との複合であり、また、本質とは事物の定義によって示される。従って、複合実体の定義の中には質料が含まれる。然るに、一般に質料は個体化の根源であるといわれる。とすると自らのうちに形相と質料とを含んでいるごとき事物の本質は個別的なものであるということになり、本来、定義は普遍的なものでなくてはならぬという理解と背反するのではないか、という問題が立てられる。ここにおいて質料の実体の本質に含まれている質料とは如何なるものであるかという議論になるのである。そしてトマスは、どんな意味の質料も質料である限りにおいて個体化の根源であるということは決してなく、ただ、指定された質料のみが個体化の根源たりうるものなることを示している。そして、その指定された質料とは、「規定された次元的延長」の下に考察される質料 *quae sub determinatis dimensionibus consideratur* に他ならないと説明し、例えば、現実のソクラテスを構成している特定のこの骨とかこの肉の謂であると説明する。そして、これに対して、人間である限りの人間の中に含まれるのはそうではなくて、むしろ、骨一般とか肉一般であって、かかるものは人間の「指定されざる質料」 *materia non signata* であるというのである。

この議論は『神学大全』第一部第八十五問題第一項第二異論解答に述べられる議論と符合するものである。すなわち、この第一項は、我々の知性が質料的物體的な事物を認識する仕方についての議論であり、その第二異論に、質料的な事物とは自然物のことであり、自然物の定義には質料が含まれている。然るに、質料は個体化の根源であり我々の知性は個別的なものは認識しえない。また、何ものもその定義に含まれているところのものを離れては認識されえない。従って、質料的な事物は知性認識されえないのではないか、という論が立てられている。異論解答は、『有と本質について』の場合と同じく、質料には二通りあって、「共通的質料」 *materia communis* と「指定された質料」とであって、後者は、また、「個的質料」 *materia individualis* とも呼ばれる。共通的質料とは「肉」「骨」のごとき、個的質料とは「この肉」「この骨」のごときである。知性は、だから、自然的な事物の種的形相 *species*

を、個的な可感的質料から切り離し抽象するが、共通的な可感的質料から切り離し抽象するものではない、というものである。ここにおいて、前著の指定されざる質料がこの共通的な可感的質料に対応するものなることは明らかであり、また、指定された質料は、規定された次元的延長の下に考察された質料であり、個的質料として知性認識がそれから種の形相を切り離し抽象するところの個的な可感的質料であると理解される。つまり、以上の箇所の指定された質料は認識論的アスペクトにおいて見られた個体の個体化の根源を語っているように解される。然し、はたしてそれでよいのか。存在論的アスペクトにおける個体の場合はどうなるのか。問題はまだ残っているように思われる。つまり、それは、いわば、*hic et nunc* のソクラテスの個体化、個体形成であり、約七十年に及んだソクラテスの生涯を通じての個性には触れていないといわなくてはならぬ。勿論、ソクラテスの約七十年の生涯といっても、それは常に *hic et nunc* に在ったのであり、その限りにおいてはその都度の個体を説明する指定された質料は立派にソクラテス一生の個体化の根源たりうるという理解も可能である。然し、他面、規定された次元的延長の数値はその都度変化するものである以上、かかる変化の連続たる指定された質料が七十年に互るソクラテスの同一性を説明しうるか、というアポリアは残るのである。我々は続いて、『ボエティウス三位一体論註解』を検討しよう。

トマスは『ボエティウス三位一体論註解』（以下本稿においては『三一論註解』と略記する）第四問題において、多数性 *pluralitas* の原因に関する諸般の事柄について問いを立てる。それは、ボエティウスの『三位一体論』第一章後半の、事物が三つ、或いはそれ以上多数存すると、それらの事物には、類的な差異か、種的な差異か、数的な差異かが属している、云々、というくだりに対する註解として展開されている。そして、第一項において、多数性の原因は他者性 *alteritas* であるか、という問いを立て、これに肯定的な解答を与え、次いで、第二項において、諸々の附帯性達の相違 *varietas* が数的な別異 *diversitas secundum numerum* を作り出すか、という問いを立てる。

そして、この問いの解決のためにはポエティウスのいうところの類的、種的、数的の三通りの別異性の原因は何であるかを見なくてはならないとして、それを実体の範疇の中の複合的な個体、すなわち、個的複合実体、然し、中心的には人間、において考察する。そして、複合的個体の中には、質料と形相と複合体としかないのだから、これらのうちの何かによってこれらの別異の原因を見出さなくてはならないとするが、最初に見通しとして、類による別異は質料の別異に帰せられ、種に基づく別異は形相の別異に帰せられ、数による別異は、一部は質料の別異に、一部は附帯性達の別異に帰せられるという見解を示している。その展開は、アリストテレス的な形而上学理論とキリスト教的な世界創造の神学的理論とが重ね併された、所謂、トマスの存在の理論の展開であって、興味深いものがあるが、いまは、最後の、一つの種に属する個体達の間如何にして別異が作られるか、という議論のみを考察する。

トマスは、質料がどのようにして類のうちに別異を作り、形相がどのようにして種における別異を作るかを明らかにして、最後に、同一の種に属する数的多数者間の別異の原因を問う。そして、類または種における別異を質料と形相との別異が形成するごとく、数における別異は、この形相とこの質料とが作る、といわれる。ここにおいて問題は始めに戻って、共通的な種的形相が如何にしてこの形相として特定されるか、ということになったのである。いま、トマスの論理を追うと大体以下のごとくである。

(1) 形相は形相である限りにおいては、自己自身によってこのものたるのではない。というのは、知性は本性的に、如何なる形相をも、それが質料または基体としての何ものかの中に受け容れられることが可能であるかぎり、多数のものに帰属せしめうるものである。そして、多数のものに帰属せしめうるということはこの何かたるものの特質に反することなのだから。だからして、形相は質料の中に受け容れられるというこのことによってしかこの形相とはなりえない。

(2) 然るに、質料も、それ自体においては他から区別されていないもの

なのだから、その限りにおいては受け容れた形相を他から区別するものではない。だから、質料の中に受け容れられた形相が他から区別されて個体化されるということは、その質料が他から区別されうるものであるということに基づいてでしかない。ということは、形相が質料のうちに受け容れられるということによって個体化されるとは、形相が *hic et nunc* にまで区別され限定されたこの質料の中に受け容れられる限りにおいてでしかないことを意味している。

(3) 質料は、然るに、量によってでしか分割されえない。それゆえ、質料は、次元的延長の下にある限りにおいて、この指定された質料となるのである。

(4) ところで、次元的延長の下にある、という時その次元的延長は二通りの仕方では考えられる。一つは、次元的延長の規定ということに基づいてである。私のいうところは、限定された尺度と形状に基づいてそれら三次元の延長が規定されるということである。そしてこの場合、このようにして完成された有は量の範疇の中に置かれるものとなる。然しこの場合、かかる次元的延長の下にある質料は個体化の根源たりえない。なぜなら、上述のごとき次元的延長の規定は、個体に関してはその存続に応じて頻繁に変化するものなのだから、固定された規定の下にある個体は同一のものとして存続しえないことになるであろうから。

(5) そこで、いま一つの仕方が考えられる。すなわち、次元的延長のこの規定ということなしに次元的延長という本性のみにおいて考えるということである。勿論、数値的規定なしには次元的延長というものは存在しえないけれども、それなしに考えるということは可能である、とトマスはいう。それは丁度、色という性質は白とか黒とかの規定なしには存在しえないけれども、色の本性という点のみを考えることは可能であるのと同じである、と。そして次元的延長をこのように考える場合、その次元的延長の下に考えられた有は、未完結なものとしてではあるがやはり量の範疇の中に置かれる。

(6) そして、かかる無規定の次元的延長の下にあると考えることによっ

て質料はこの指定された質料となり、かくして形相を個体化することが可能となり、このようにして同一の種における数的な別異が質料によって原因される。

(7) だから、質料は、それ自体としてとられる限り種的な別異の根源でも、数的な別異の根源でもなく、却って、共通的な形相の下にある限りにおいては類的な別異の根源である。そして、上述のごとく無規定の次元的延長の下にある限りにおいて数的な別異の根源である。そして、この次元的延長は量という附帯性の範疇に属するのだから、数的な別異は、時としては、質料の別異へと帰せられ、時としては附帯性の別異へと帰せられるのである。

(8) それ以外の附帯性達は個体化の根源ではない。然し、個体達の区別を認識する根源ではある。そして、かかる意味によって量以外の附帯性達にも個体化ということが帰せられるのである。

以上が『三一神論註解』におけるトマスの個体化の根源の理論である³⁾。その限りにおいてトマスは極めて直截に存在論的アスペクトにおける個体を本来的なものとし、*hic et nunc* の個体は二次的なものとしているのが理解される。肉体から分離した魂にまでより大きな関心を抱く立場からすれば、むしろ当然であろう。

ところで、かかる「無規定の次元的延長の下に考えられた指定された質料」が、現世に存在する限りの個物の個体化の根源であるということは何を意味しているか。これが続いて考察されるべき問題である。

先づ第一に、二つのアスペクトの下の二つの個体は如何に関わるものかが問われなくてはならぬ。すなわち、本来的な個体化の根源は、専ら、「種的には相互に異ならない」⁴⁾といわれる人間の魂をソクラテスの魂へと特定するためのもので、それが指定された質料たるソクラテスの肉体であった。すなわち、上記の、この質料が共通的な、形相である限りの形相をこの形相へと特定したのである。この間の経緯をトマスは、『神学大全』では、「全体を産出するところの普遍的能動者たる神は、形相と質料とを同時に産出する者なのだから、その場合には、神自身が形相と目的とに適合した質料を同時に

産出すると考えられるのが合理的である」といい⁵⁾、『能力論』では、人間の魂達の区別は、質料因的な根源という意味では身体への合一から到来するが、作動因的な根源という意味では神から由来する旨を明言している⁶⁾。つまり指定された質料たるソクラテスの肉体は、神によってソクラテスの魂に指定されたものなることが明らかである。ここで注意すべきことは、そのソクラテスの魂は産出の時にソクラテスの肉体と合一するものたる限りにおいてソクラテスの魂たるのであって、それ以外に、或いはそれ以前には神の知においてもソクラテスの魂はありえない、とトマスは考えていることである。トマスは『対異教徒大全』においても「それゆえ、魂が身体より先に存在していたのではない」と明言しているが⁷⁾、『能力論』においても、「理性的魂は肉体の中に創造されたか、又は、肉体なしに創造されたか」という一項を立ててこの問題を問い⁸⁾、明白に、肉体の中に創造されたと解答する。その論拠の主要な一つは、もし肉体なしに創造されたとするならば、それは天使の場合と同じく、一つの種に一つの個体しかありえないであろうというのである。ここからすると、トマスは他の箇所において、人間の魂、或いは、理性的魂について、「或る種の非物体的にして自存する根源」⁹⁾とか、「或る仕方自己自身によってこの或るものたるのである」¹⁰⁾と述べているが、それらは死後の肉体から分離した魂と理解されるのが適当と思われる。

以上、存在論的アспектにおけるソクラテスが個体化の根源によって個として生ずる経緯は明らかとなったが、では認識論的アспектにおける時間tのソクラテスは如何に個体化の根源と関わるのであろうか。これに関しては、『神学大全』第一部の実体的形相についてのトマスの記述が光を与えるように思われる。すなわち彼はそこで、「人間のうちには他の如何なる実体的形相も存在せず、ただ知性的魂あるのみである。そしてこのものが、そのちからの完全性のうちに感覚的魂や栄養摂取的魂を含むとともに、同様に、また、そのちからの完全性のうちにあらゆるさらに下位の形相をも含むのであって、かくしておよそより不完全な諸々の形相が他のものにおいて果すほどのいずれのことがらをも、それは自分だけで以て果すのである」¹¹⁾

といい、また別に、「より完全な形相はおよそその下位の形相に属するほどのことがらのことごとくを、そのちからの完全性のうちに包含している。だからしてそれは一つの同じものとして存在しながら、さまざまな完全性の段階に即して質料を形成する」¹²⁾ ともいうのである。ここにおいて我々は、先づ、ソクラテスの生涯の時間軸上の各時点における *hic et nunc* のソクラテスを形成するのは、個体化の根源によってソクラテスに特定されたソクラテスの魂にはかならないことを知りうる。従って、認識論的アスペクトにおいて見られる *hic et nunc* のソクラテスの個体化の根源を敢て問うならば、それはソクラテスの実体的形相、知性的魂でなくてはならぬ。然し実体的形相が不可知不可称であることはトマスが繰り返し確言するところである。例えば、彼は、「それ自体としては我々に知られないものたる実体的形相は、種々の附帯性によって知られるのであるから、或る場合には附帯性が実体的差異の代りに措定されることがあっても何ら差し支えることはない」¹³⁾ といひ、また、「実体的な差異 *substantiales differentiae* は我々に知られてはいず、また、名づけられもしないのであって、我々は、だから、時としては附帯的な差異を用いざるをえない」¹⁴⁾、ともいっている。ここにおいて我々は、上記『三一論註解』の個体化の議論の最後にトマスが、「それ以外の附帯性達は個体化の原理ではない。然し、個体達の区別の認識の原理ではある。そしてこの意味によって個体化ということが他の附帯性達にも帰せられるのである」¹⁵⁾ と記した意味を理解しえたであろう。

以上においてトマス・アクイナスの個体化の根源としての指定された質料の考察を了る。

§ 2 ドゥンス・スコトゥスにおける個体化の 根源としての「個別性」について

次にはスコトゥスの個体化の理論について検討する。スコトゥスが個体化の根源の問題を取り扱っている最も主要な箇所は、『命題集オクスフォード註釈 (オルディナチオ)』の第二巻第三区分の第一問題から第七問題までで

あると思われる。この第三区分は天使の諸問題が考察されているところであるが、そこで天使の個体化、多数化の問題がとりあげられ、その準備的考察として、質料の実体の個体化の理論が検討されるという構成になっている。スコトゥスは、先づ、第一問題から第五問題までに、当時行われていた質料の実体に関する五つの個体化の理論を取り上げて、その考察を自説への導入部としながら第六問題で自説を展開し、第七問題で天使の個体化を論じている。我々は、いま、これに依ってスコトゥスの個別性の理論を見て行くことにしたい。

スコトゥスは先づ第一問題において、唯名論者の説とされる、個物はもともとそれ自体によって個物であり、別に個体化の根源などというものは要しないのだという理論を取りあげる。然し、彼はその時、それ自体によって、自らによって *per se* というのを、自らの本性によって *per naturam suam* ととって、「質料の実体は自らの本性によって個体であるか」という問いを立てるのである。従って、彼によるとこの説は、すべて質料の実体たる個物は自らの本性によってこのものであるということになり、これは直ちに不合理であるといわれる。すなわち、いまこの石があって、それは自らの本性、すなわち石の本性そのものによってこの石であるとするならば、個物はすべてその本性を有つただから、石の本性を有ったあらゆるものはこの石であることになるだろうといわれるのである。もしもソクラテスが自己の本性によってソクラテスであるならば、その本性たる人間性そのものがソクラテスなのであって、従って人間性の本性を有つ者はすべてソクラテスである、というのと同じである。かくして、先づ、個物の本性はそれ自体において個別的なものではないということが確認される。然しこれは、スコトゥスにとって、単なる論理的思惟の帰結などではなく、このテキストにおける彼の無意識的な記述言語からして、無条件的な日常生活の、或いは、経験の大前提であったことが認められなくてはならぬ。すなわち、あらゆる個物、個体の中には何らかの共通的な本性があって我々はそれを直接知ることができるのである。すなわち、スコトゥスの場合、「ソクラテスを見る」ということと「人

間を見る」ということとは同じ直接性と確実性を有った経験事実であったのである。むしろ、人間を見る方がより前であるかも知れない。スコトゥスはそれを感覚の知覚作用によって説明している。

例えば、感覚が或る家の或る壁の白さを見るときとする。その場合、感覚は *hic et nunc* に在るこの白さを見るのではなく、むしろ、共通的な白さを見る。それがこの家のこの壁のこの白さであることは、より後に、共通感覚の諸対象との照合によってはじめて他から区別されるのが事実であるというのである。また、いかなる感覚も太陽のこの光線が他の光線から数的に異っていることを区別するものではないと断言する。また、論理的に、その他諸々のもの達の差異を知ったり、比較をしたり等々の経験的事実は、個々の事物の中に何らかの共通的な本性が実在的に存在しているのでなくては説明しえないところである。スコトゥスは先づ唯名論者の説を斥けることによって個物の中の共通的本性の実在を主張する。

然し、ここにスコトゥスにも問題が生ずる。それは、個物の中に普遍が実在するという時に生ずる古くからのアポリアである。これを解消せしむるためにスコトゥスは二つの巧妙な論理を案出する。一つは「数的な一性より小さい実在的な一性」*unitas realis, minor unitate numero* の概念であり、いま一つは「無記性」*indifferentia* の概念である。すなわち、実在的に一であるものが一つの個体の中に二つ存在することは不可能である。然るに、この「数的な一性より小さい実在的な一性」を有つことによってこの本性は、或る特定の個別的的事物の中に実在的に存在しながら、それ自体としては、他の事物の中に存在することが自らに悖反しない、という「無記性」を有することになるのである。すなわち、本性は、それ自体としてはこのものに特定されない。すなわち、無記であるといわれる。また、知性の中に在るか個体の中に在るかも無記である。従って、普遍か個別かも無記である。スコトゥスはこれをアヴィセンナの「馬性 *equinitas* は単に馬性に過ぎない。——自らによっては一でもないし多でもない。また、普遍でもないし個別でもない。」に比している¹⁶⁾。いうところは、馬性は自らによっては数的一性によって一

たるのではなく、またその一性に対立する多数性によって多であるのでもない。(つまり、多でないという一性と一でないという非一性から小さい一性が案出される。) また、現実態において普遍的でもなく、(すなわち、或るものが知性の対象であるその時に普遍であるという仕方で普遍なのではなく、) また、自らによって個別的なのでもない、というのである。すなわち、知性がソクラテスの中に本性としての人間を認識してもそれはまだ普遍ではないのであり、それはいわば、「理性的動物」としての人間、「歩くもの」としての人間に過ぎないのである。

このようにして第一問題において、事物の中には本性という何か共通的(より正確には無記)なものが実在的に存在していて、それは自らによってはこのものではない、という唯名論者に対する反対の立場が確立される。そして、それは自らによってはこのものではなくて、しかも現実的にはこのものの本性として存在するのであるから、事物の中に在ってその本性をこのものへと特定する何か求められなくてはならない。そして、これが個体化の根源と呼ばれるものに他ならない。

第二問題においてスコトゥスはガンのヘンリクス主張とされる所謂二重否定説を批判する。それは、「個性」というものは二重の否定で成立するという。すなわち、個体とは一なるものであり、自らにおいては分割の否定、他に対しては同一性の否定によって語られると解する。よって、何か特別に個体化の根源というものの必要を認めないものである。スコトゥスの批判は、それは個性一般の説明にはなるかも知れないが、この個体を特定するためのこの否定は出て来ない。また特に、他に対して *ad aliud* の同一性の否定は単なる他との関係に終って自己の個性の根拠とはなりえないとする。だからやはり、個体化の根源は、自らのうちにあつて (*in se*)、他との関係によるのでない (*ad se*) もので、何かを肯定的に措定しうるもの (*positivum*) でなくてはならぬということになる。

第三問題は、アリストテレスの『形而上学』第八巻から、究極の区別は究極の現実態によって齎らされる、然るに、個体の究極の現実態とは現実存在

の存在そのものに基づいてある、というテーゼがとり出されその究極の現実存在の存在そのものが究極の個体をそのものたらしめる、という説を論駁する。それは、一つには、この究極の個性はまさに *hic et nunc* の極における個体であり、存続すべき個体には妥当しないし、また、この存在そのものは、自らによって区別されたものでも規定されたものでもない。然るに、自己自身に区別や規定の根拠を有たないものは他を区別し規定することはできない、というものである。ここにおいて我々はスコトゥスにおいても、トマスにおける実体的形相のごとく、自己自身の中に個体を形成してゆく機能あるものが個体化の根源として求められていると考えられる。

第四問題においては量が、第五問題においては質料が個体化の根源として失格とされる。すなわち、量は、より一般的に附帯性としてとらえられ、実体の同一性を変ずることはありえないのだから、実体の個体化の根源たりえない。実体は実体変成によってのみ変りうる、という。また、質料はそれ自体未規定なもの、規定を受け容れるものなのだから、質料がそれ自身に基づいて複合体を規定することは不可能とされる。

以上五つの説の批判によってスコトゥス説の輪郭が明らかになる。個物の中に小さい一性をもって実在する本性は、自らによって共通的なものであって、個別的であるよりも、時間的または自然本性的に、より前に本性たるのであって、然る後に事物の中であってそれへと到来する何ものかによって個別的たるように特定されるべきものである。この本性を特定する何かが個体化の根源であるが、それはスコトゥス自身によってもさまざまに呼ばれて一定しないが、個別性、特定する或る何か *aliquid contrahens* 個体的差異 *diferentia individualis* 等がよく見られる。そしてそれが、上記からして、内在的であること、実体の範疇に属すること、質料的でないこと、即ち、形相的なこと、否定的なものでなく肯定的で何かを措定するもの *positivum* 等の条件に適合すべきものなることが明らかとなった。本性の方は、研究者によっては共通本性と一般に呼ばれているがスコトゥスは本性とのみ語っている。以下本稿では「本性」と「個別性」を代表名辞として使用することにする。

用語の問題は些か混雑していて晦渋である。論理的に整理すると、先づ本性があって、これはそれ自体としては無記であるという意味で共通的といわれ（普通ではない）自己に固有の小さい一性によって事物の中に実在する。この共通性は本性自体によって本性に帰着する。然し個別性はその事物の中であって本性を特定する何かによって本性に帰着する。この何かが、類一種関係との類似から種一個関係として見られ、種の差異、種差に比して個体的差異と呼ばれる。然し、究極的に本性を特定するこの何かは当の個別性以外にはないのである。つまり、人間性をソクラテス性へと特定するものは、そのソクラテス性自身としかいいようのないものである。スコトゥスは第六問題において、それから個体的差異がとられるところのその個体的有性とは何かと問うている。その答えは、質料であり形相であり複合体であるところの有の究極の実在性 *realitas* がそれであり、個別性の有性 *entitas*こそがそれであるというのである¹⁷⁾。ここで有の究極の実在性といわれるのは、勿論、前に第三問題で斥けられた *hic et nunc* の現実存在の実在性ではありえない。ソクラテスである限りのソクラテスの個別性の有性、いわゆる、ソクラテス性でなくてはならない。いま一つここから明らかになることは個別性の形相性ということである。すなわち、個別性の有性は、この形相の有性とこの質料の有性とそれらが複合したこの複合体の有性とから成る一つの有性と捉えられる。本性の有性も形相の有性と質料の有性と複合体の有性とから成る。そしてこれらの有性達はこの一つの個体の中に実在していて、しかも、それらは相互に形相的に区別される *distinguuntur* といわれる。これが所謂、形相的区別であるが、従って、これらの有性はすべて形相性として把握され、この形相とこの質料との合一したこの複合体という個別者の個別性は全面的に形相的原理としての一つの形相性である。従って、ソクラテス性によって個体化されたソクラテスの魂は純粹形相ということになるのである。

ここにおいてスコトゥスは、また、神は人間の魂を肉体との結合なしに創造することができる。ただし、固有の個別性によってこのものたるのでない限り、それは肉体の中にも造ることはできない、という¹⁸⁾。更に、現実

存在している実体は如何なる附帯性によってもこの[・]実体たるのではなく、それは「指定されたこの個別性」 *haec singularitas signata* によってこの実体たるのである、といわれる¹⁹⁾。ここから、この指定された個別性は、トマスの指定された質料によって個体化された実体的形相と同格のものとなるのであり、しかもそれは純粹の形相的原理として質料から離れて独り歩きしているといわなくてはならないであろう。すなわち、それは、トマスにおいてはタブー視されていた、種的形相を更に分割した個的形相が作り出されたということにほかならない。とするとそこにまた新しい問題が生起する。すなわち、トマスの場合、普遍的能動者である神は形相と質料を同時に産出するのであった。更に、神自身が形相と目的とに適合した質料を産出すると考えるのが合理的である、ともいわれた²⁰⁾。すなわち、一方からいえば、第一質料は純粹可能態として形相なしには現実態として存在しえなかったのであり、他方からいえば、すべて質料の実体は形相と質料との複合体として完成した個物として創造されたのである。然し、いま、質料の実体の（少なくとも人間という）実体的形相が質料なしに産出されることが認められたのである。質料はどうなるのか。質料も形相なしに創造されることが認められるのである。

『命題集オクスフォード註釈』第二卷第十二区分においてスコトゥスは、「何らかの能力によって質料は形相なしに存在しうるか」という問題を立て、その解答において、如何なる実体的形相も附帯的形相もなしに質料が存在するという事は矛盾ではない、と明言し、また、神は質料を直接的に創造し、直接的に保存すると述べている²¹⁾。ここで直接的にとは第二原因たる形相の力を借りずにというのである。

このように質料の実体の形相と質料とが別々に独立に産出されることが認められるところから、上述の新しい問題、すなわち、それらの形相と質料とはどのようにして複合するのかが説明されなくてはならなくなったのである。この説明についても種々の解釈が可能であるようであるが²²⁾、我々は次の解釈によってこれを理解したい。それは上に個体化の根源について我々が

依拠して来た第三区分の第七問題の記述を根拠とする。それは、「同一の種の中に多数の天使が存在することは可能であるか」を問い、可能であるという解答を展開するのであるが、その傍証として、人間の魂が天使と均しく純粹形相でありながら、同一の種の中で多数の魂が区別されている、という論理を出すのである。

そこで、これに対して異論が立てられる。すなわち、人間の魂達は別々の肉体への傾向性 *inclinatio* を有っていて、その質料を完成させるという適性 *aptitudo* を有っている。だからその別々の対応関係 *habitudines* によって区別されているのであって、純粹に形相として区別されているのではない、というのである。それに対してスコトゥスは、それはむしろ逆であって、別々の肉体への傾向性という質料との関係によって魂が区別されているのではなくて、より前に独立の個別性によってこの魂があゝの魂から区別され、この魂であるからこの傾向性を有つのである、というのである。より前なる有性によってこの魂たるのであって、それを前提としてこの肉体への傾向性も生ずるというのは、まことにスコトゥスらしい論法であるが、それと共に、この同様のいくつかの議論からして、この魂がこの肉体への傾向性を有って、その肉体を完成せしめるものであるということも、単なる異論の主張ではなくスコトゥス自身も認めていることが看取されるのである。かくして、ここにおいて、人間の魂は純粹形相であって純粹に形相的に他の魂から区別されることと、その区別された魂はその区別されたことによって次に区別された肉体への傾向性を有つに至り、その肉体を完成させる適性を有ち、その肉体と複合する、と解することができる。かくして、スコトゥスの「個別性」は、トマス「指定された質料」とは全く異った論拠に立ちながら、やはり同様に、個体化の根源の理論を完成していると認められる。

註

- 1) Heinz Heimsoeth, *Die sechs großen Themen der Abendländischen Metaphysik und der Ausgang des Mittelalters* 4. Auflage, Stuttgart, 1958, ss.

13-15; 183-184.

- 2) トマス『神学大全』第一部第二十九問題第一項主文。
- 3) トマス『ボエティウス三位一体論註解』第四問題第二項主文。
- 4) トマス『対異教徒大全』第二卷第八十三章。
- 5) トマス『神学大全』第一部第四十六問題第一項第六異論解答。
- 6) トマス『能力論』第三問題第十項主文。
- 7) 註(4)と同じ。
- 8) トマス『能力論』第三問題第十項。
- 9) トマス『神学大全』第一部第七十五問題第二項主文。
- 10) トマス『ボエティウス三位一体論註解』第四問題第二項主文。
- 11) トマス『神学大全』第一部第七十六問題第四項主文。
- 12) トマス『神学大全』第一部第七十六問題第六項第一異論解答。
- 13) トマス『神学大全』第一部第七十七問題第一項第七異論解答。
- 14) トマス『神学大全』第一部第二十九問題第一項第三異論解答。
- 15) トマス『ボエティウス三位一体論註解』第四問題第二項主文。
- 16) スコトゥス『オルディナチオ』第二卷第三区分第一部第一問題, n. 31. (ヴェ
チカン版全集第七巻. 以下同じ. n. 31 は第三区分通しの欄外の節番号.)
- 17) 同上第六問題, n. 187, 188.
- 18) スコトゥス『自由討論集』第二問題, n. 5. (ヴィヴェス版全集第二十五巻六十
二b-六十三a)
- 19) スコトゥス『オルディナチオ』第二卷第三区分第一部第四問題 n. 77.
- 20) 註(5)と同じ。
- 21) スコトゥス『命題集オクスフォード註釈』第二卷第十二区分第二問題 n. 3, 4.
(ヴィヴェス版全集第十二巻五七六 a, b)
- 22) 例えば, T. M. Rudavsky, *The Doctrine of Individuation in Duns Scotus*,
c. 1, § 5 (in *Franziskanische Studien*, Vierteljahrschrift, 1977, pp. 349~352)
参照。